

国際真宗学会・第六回大会の開催

——「大乘の至極 浄土真宗」——

小 野 蓮 明

一

本年（一九九三）の八月三日から五日までの三日間にわたって、大谷大学を会場として、「国際真宗学会第六回大会」(The Sixth Biennial Conference of the International Association of Shin Buddhist Studies) が開催された。一九八三年に龍谷大学で第一回大会が開かれて以来、二年に一度開かれてきた学会である。第二回大会より第五回大会までは、ハワイ（本派本願寺ハワイ別院）や北米（カリフォルニア州立大学バークレイ校）で開かれてきたが、今回学会事務局からの強い要請を受けて、大谷大学を大会会場として開催されたのである。寺川俊昭学長が大

会実行委員長となり、大学・宗門一体となって国際真宗学会第六回大会が盛大裡に開かれたのである。

国際真宗学会は、もともと本派本願寺の海外開教が背景となつて設立された学会であつて、当初は西本願寺の開教使の方々が中心となつて会を支えていたと聞く。近年は数多くの世界の仏教研究者が参加され、宗派の枠を超えて真宗仏教、親鸞の信仰思想を研究し研鑽する貴重な場として開かれてきているのである。これまでの大会にも本学から何らかの形で参加されたり、研究発表をされてきたのであるが、今大会が大谷大学を会場とするということもあつて、これまでに数多くの意欲的な研究発表と積極的な参加が期待されたのである。

真宗大谷派が世に捧げた大学である大谷大学を大会会場とすることは、ただ大会会場を大学が提供したというだけでなしに、今日の国際社会のなかで、大谷大学が蓄積してきた真宗仏教研究とその理解が、どのように評価され意義づけされるのか、これを確かめる絶好の機会である。具体的にいえば、清沢満之以降のいわゆる近代真宗教学、近代現代の大谷派における親鸞研究のもつ意義が、世界的な視野のなかで問われ、評価される絶好の時であるからである。いまや世界の思想界は仏教に、就中浄土教、親鸞の思想に大きな関心がもたれ、特に大谷派の近代教学を形成してきた清沢満之、暁烏敏、曾我量深、金子大榮、安田理深などの真宗理解とその思想が、あらゆる方面から注目されていると聞くからである。そのような今日の状況を踏えて、大会企画を準備する準備委員会が、大学の要請で結成された。小川一乗教授をチームに、福島光哉教授、安富信哉教授、宮下晴輝助教授、加来雄之専任講師、そして私とでスタートし、問題を具体化する段階で、多田稔教授とロバート・F・ローズ専任講師が参画された。

まず第六回大会のメーン・テーマを「大乘の至極 浄土真宗」(『Jodo Shinshu: the Ultimate Teaching of the

Great Vehicle』と掲げることになった。この言葉は、親鸞が『末灯鈔』第一通で、

浄土宗のなかに、真あり仮あり。真というは、選択本願なり。仮というは、定散二善なり。選択本願は浄土真宗なり。定散二善は方便仮門なり。浄土真宗は大乘のなかの至極なり。(『真宗聖典』六〇一頁)

と述べているものである。建長三年(一二五一)七九歳の親鸞のこの言葉には、その長い仏道の歩みを貫いて志向されたものは何であったのが、直截明瞭に示されている。そこには、大乘仏教の真理性をひたすら尋ね求めた親鸞、そして遂に「浄土真宗」こそ「大乘のなかの至極」であると確証し、断言し得た親鸞が、そこにある。大乘の至極としての浄土真宗——親鸞が大乘仏教の真理性を問いつづけ、一切苦悩の群生海に開かれた本願念仏の一道を「大乘のなかの至極」として開顕し尽くした、その視点を、われわれはもう一度確認しなおして、「浄土真宗」の教えのもつ意義を、現代社会において受けとめ直すことが必要である。このような観点から、大乘仏教としての「浄土真宗」の意義を問い尋ねたいという願いを込めて、「大乘の至極 浄土真宗」という大会テーマが選ばれたのである。

法然、親鸞、道元、日蓮などの鎌倉初期のすぐれた仏教者達によって、仏教は完全に日本人のものとなったと言われる。仏陀世尊の教えが中国に伝えられるまでに約五百年、中国からさらに日本に伝来するまでにまた五百年、その仏教が日本人の生活に根をおろしたのは、法然や親鸞、一遍などの並々ならぬ努力によるものであることは周知の事実である。

親鸞は、真宗開頭の著である『教行信証』に、「大無量寿経眞実之教 浄土真宗」と標榜されたように、浄土真宗は『大無量寿経』に開かれた仏道、すなわち選択本願念仏の仏道である。よき人・法然の一向専念の教えに出遇った親鸞は、そこで獲得した念仏の信を、インド、中国のすぐれた大乘の仏教者である世親や曇鸞の思想的感化に養育されて、大乘仏教の根本知見にまで純化徹底することによって、選択本願念仏の一道を教説する『大無量寿経』を「眞実の教、浄土真宗」と断言したのである。

ひとすじに、具縛の凡愚、屠沽の下類、無碍光仏の不可思議の本願、広大智慧の名号を信樂すれば、煩惱を具足しながら無上大涅槃にいたるなり。〔真宗

聖典「五五二頁」

『唯信鈔文意』のこの一文は、親鸞が『大無量寿経』から学び、かち得た仏道の知見を完全に言い切っている。

煩惱濁の凡夫なるものが、無碍光仏の不可思議の本願、広大智慧の名号の信樂において、「煩惱を具足しながら無上大涅槃にいたるなり」と言われるのである。「正信偈」には「能発一念喜愛心 不断煩惱得涅槃」と讚歎されている。この一点に大乘の仏教者としての親鸞の信念がある。このような信念に開かれる仏道を「浄土真宗」と叫んだのである。浄土真宗、それは群萌に開かれた「大乘のなかの至極」なのである。

親鸞は師法然に導かれて立ち得た眞実の仏道、浄土眞実との値遇の感動を、『教行信証』「総序」において、

ああ、弘誓の強縁、多生にも値いがたく、眞実の淨信、億劫にも獲がたし。たまたま行信を獲ば、遠く宿縁を慶べ。〔真宗聖典〕一四九頁

と言ひ、さらにその信念の抛って来たる源泉を尋ねて、ここに愚禿積の親鸞、慶ばしいかな、西蕃・月支の聖典、東夏・日域の師積、遇いがたくして今遇うことを得たり。聞きがたくしてすでに聞くことを得たり。〔真宗聖典〕一五〇頁

と述べている。インド・中国・日本にわたって真実教を開顕された大乘の仏教者との出会いと、その教言に育まれた決定的な教恩とを、今更のように境遇の感動を込めて表白されている。恰も後の覚如が『御伝鈔』で、

悉く彼の三国の祖師、各々此の一宗を興行す。所以、愚禿勸るところ、更にわたくしなし。(『真宗聖典』七三五頁)

と言われたように、親鸞にとつて、本願の仏道・浄土真宗は、インド・中国・日本におけるすぐれた大乘の仏教者たちによって形成された「一宗」であり、より具体的には「南無阿弥陀仏」の大方の展開、大方の歴史であつて、いま親鸞は、その大方の歴史に召され、大方のいの中に喚び帰されて本願の真実を生きるものとなつたといふ、深く限らない感動と感激が、そこに漂っている。親鸞は、法然の一向専念の教言に値遇し、その念仏の源泉を深く尋ね当てて如来選択の願心に深々と目覚め立つたのであるが、その本願の歴史、大方の歴史的现实を尋ねて、インド・中国および日本の大乘の祖師たちを「此の一宗を興行」された祖師と仰いだということは、親鸞の本願開顕のまなこは、つねに「帰本願」の内面を一層深く掘り下げて、如来の願心聞き当てんとする内への眼

と同時に、外への眼、本願の歴史的展開を尋ねて、広く深く「世界」に向けて開かれていたというべきである。

『教行信証』は、その題号を『顕浄土真実教行証文類』と掲げているように「文類」である。浄土真実を開顕する大乘の祖師達の要文を類聚し、それをもって本願念仏の仏道の真実性と普遍性を開示しようとするものである。そのような仏教の確かめ、仏道の学びそのものが、すでにして「世界」に向けられた親鸞のまなこであると言えないだろうか。「浄土真宗は大乘のなかの至極なり」という親鸞の断言は、本願念仏の歴史的展開の源泉を尋ね明らかになしようとする、世界に向けて開かれた大きなまなこのなかで領かれた、親鸞の確信であつたのである。親鸞における真宗開顕という一大仏事そのものが、つねに世界に開かれた視野のなかでなされた仏道の学びであつたことを、われわれは深く注意すべきである。釈尊の仏教を「真宗」として開顕された親鸞の仏教の学は、つねに「三国の祖師」という外に開かれた世界的な視野のなかでなされたとすれば、今日のわれわれが親鸞の思想や、その自覚的世界を学び尋ねようとするとき、必ず要請されるのが、内観の「まなこ」と同時に、世界を窺る確かな「まなこ」ではあるまいか。親鸞がつねに見据えてい

た世界へのまなこを、もし見落してしまうならば、それこそ狭い宗派内の教義学か教理学になってしまふであらう。

その意味で、今回、親鸞の仏教精神を建学の精神とする大谷大学で、国際真宗学会大会が開かれることは、世界の各地から真宗仏教の研究で第一線で活躍されている多くのすぐれた研究者が一堂に会するということと同時に、親鸞の真宗開頭のまなこを、もう一度親鸞に立ち帰って見極める「時」を持つことになったのであると、私は了解するのである。

三

大会準備委員会のもとで企画立案されてきたことが、実行に移されるべき大会実行委員会が、第一研究室所属の教員を中心に結成されたのが七月の初めである。特別研修員や大学院生、学生の多くの助力を頂いて、大会実行推進のためのいくつかのチームが生まれ、運営に当たることになった。

また大学当局はもとより、総務課や企画課をはじめ、多くの事務局より諸準備の助力をいただいた。とりわけ図書館課では、大会期間中、特別記念展観「親鸞から現

代へ」(From Shinran to the Present)を開いていただき、「図書館所屬真宗関係貴重資料展観目録」が刊行された。記念展観では、親鸞の『教行信証』の古写・刊本、七祖聖教及び列祖の撰述の貴重書、さらには清沢満之、南条文雄、佐々木月樵、鈴木大拙、曾我量深、金子大榮などの諸師の主要著書などが展示され、参加者の多くの注目をいただいた。

八月二日(月)開会式場、パネル会場、セッション会場などの設営が行われ、午後一時より大学の正面で、大会受付が始まる。

午後四時三〇分より国際真宗学会運営委員会が、からすま京都ホテルで開かれる。終了後、国際真宗学会運営委員、学会関係者、真宗大谷派関係者、大谷大学関係者のレセプションが同ホテルで催された。

「大乘の至極 浄土真宗」の大会テーマのもとに、三日間にわたって研究発表や討議が行われたのであるが、その形式は大きく分けて二つの形式で進められた。一つはパネル形式の討論会であり、いま一つはセッション形式の研究発表である。パネルとセッションの各部会のテーマは次の通りである。

パネル1 往生——現代における救いの問題

パネル2 対話上の諸問題——多元世界と浄土真宗

パネル3 言葉と解釈——聖典の翻訳をめぐる

パネル4 //精神主義//の意義——近代における浄土

真宗の表現

セッション1 浄土真宗と現代的課題

セッション2 大乘としての浄土教

セッション3 仏教とキリスト教における欲望と慈悲

セッション4 真宗研究の現代的方法

セッション5 歎異抄研究の視座

セッション6 真宗学の諸課題

「往生」の理解について近年さまざま問題がおこっているなかで、親鸞の往生観、真宗における救済の真義を討論する部会(パネル1)。近代真宗学あるいは近代親鸞教学というとき、まず問題になるのは清沢満之である。清沢満之の獲得したあの信念とその精神主義は、真宗の歴史の上において、まさに開拓的な意義をもつ真宗理解であると思われるが、そのもつ今日的意味をあらためて論議する部会(パネル4)。さらには対話上の諸問題——多元世界と浄土真宗(パネル2)、言葉と解釈——

聖典の翻訳をめぐる(パネル3)の四つのテーマのもとで、パネル形式の討論会が行われた。

またセッション会場の方では、それぞれの研究課題のもとで大変貴重な研究発表が行われ、どの会場の場合も、質疑応答が活発に続けられて、予定の時間を超えるほどの熱心さであった。大会の様子を知っていたくために、煩をいとわず日程とパネルとセッションの発表者とそのテーマを掲載しておく。

八月三日(火)

午前八時より大会受付

午前九時 開会式(講堂)

○パネル1(一一一三教室)(一〇・〇〇—一一・〇〇)

「往生——現代における救いの問題」

司会 長崎法潤(大谷大学)

通訳 羽田信生(沼田仏教翻訳研究センター)

大乘の真理としての還相

徳永道雄(京都女子大学)

人間の純粋な行為としての「帰依」もしくは「帰命」について

ジョン・ロス・カーター(コルゲート大学)

往生の背景

佐藤正英 (東京大学)

往生——正定聚の機

神戸和麿 (大谷大学)

「大乘としての浄土教」

司会 徳永道雄 (京都女子大学)

通訳 今井亮徳 (パークレー東本願寺)

誓願 一仏乗

小野蓮明 (大谷大学)

親鸞の仏性論と「大乘の至極」としての浄土真宗

三明智彰 (大谷大学)

『大経』の世界

新井俊一 (相愛女子短期大学)

○セッション1—A (一三二二教室)

(一三・三〇—一四・四五)

「浄土真宗と現代的課題」

司会 ケネス・K・タナカ (IBS)

通訳 トーマス・カシュナー

(南山宗教文化研究所)

親鸞と現代の個人主義

ゲアハート・シェパース (国際基督教大学)

親鸞を読むことにおけるジャンルの問題

マーク・ウンノ (スタンフォード大学)

浄土真宗のゲノンの解釈序論

ヒカルド・マリオ・ゴンサルウエス

(サンパウロ大学)

○セッション1—B (一三二二教室)

(一五・一五—一六・五五)

「浄土真宗と現代的課題」

司会 安富信哉 (大谷大学)

通訳 伊東憲昭 (ウエストコビナ東本願寺)

浄土真宗とプロセス思想

横田俊二 (筑紫女学園大学)

真宗と禅における対話の基礎としての自覚の問題

グレゴリー・G・ギブス (本願寺国際センター)

○セッション2—A (一三二二教室)

(一三・三〇—一四・四五)

現代西欧人にとって、浄土真宗において本質的に重要と思われること——親鸞の経験における浄土の所

在について

アグネス・妙珠・エンジェエスカ（本派本願寺）
「はからい」もしくは「理性」——親鸞とテイリッ
ヒの否定と肯定

野村伸夫（京都女子大学）

○セッション2-B（一三一二教室）

（一五・一五—一六・五五）

「大乘としての浄土教」

司会 レスリー・カワムラ（カルガリー大学）

通訳 ロバート・F・ローズ（大谷大学）

終末における始まり——真宗とゾクチェンにおける
非行

ロジャー・J・コーレス（デューク大学）

チベット仏教における浄土信仰

小谷信千代（大谷大学）

浄土の考察——『維摩経』を中心として

織田顕祐（大谷大学）

浄土真宗と『維摩経』の本義

橋本芳契（金沢大学）

○公開講演（講堂）（一八・三〇—二一・〇〇）

浄土のイメージ——何が物語りを意味深くするか——

ルイス・O・ゴメズ（ミシガン大学）

信仰のダイナミックス——回向と願生——

寺川俊昭（大谷大学）

通訳 村瀬順子（大谷大学）

パトリシア・A・ホンダ

（東本願寺ロサンゼルス別院）

八月四日（水）

○パネル2（二—三教室）（九・〇〇—一一・〇〇）

「対話上の諸問題——多元世界と浄土真宗」

司会 多田 稔（大谷大学）

通訳 トーマス・カシュナー

（南山宗教文化研究所）

純粹な対話のための基本的な姿勢

デニス・ギーラ（パリ・カトリック研究所）

禁欲主義に抗して——対話から対行動へ

ジェームズ・W・ハイジック

（南山宗教文化研究所）

真宗とビジネス

グスタフ・A・ピント

(カンデイド・メンデス大学)

浄土真宗の究極性——親鸞の天台に対する応答

アルフレッド・ブルーム (IBS)

○セッション11C (二二二三教室)

司会 ルース・M・タブラ

(本派本願寺ハワイ別院)

通訳 今井亮徳 (パークレー東本願寺)

浄土真宗の西欧的適応——アメリカの労働倫理の基

づくアプローチ

ゴードン・ファング

(カリフォルニア総合研究所)

グレゴリー・ファング

(カリフォルニア総合研究所)

超倫理的責任性とソクラテスの徳の倫理学の予備的

考察

デービット・ウェイン・リー (IBS)

マーカス・レオン

(カリフォルニア総合研究所)

真宗とデス・エデュケーション

田代俊孝 (同朋大学)

○セッション3 (二二二二教室)

「仏教とキリスト教における欲望と慈悲」

司会 ジェームズ・L・フレディリック

(ロヨラ・メアリーマウント大学)

通訳 マーク・T・ウンノ

(スタンフォード大学)

欲望の解放——信心とキリスト教における神の探求

ジェームズ・L・フレディリック

(ロヨラ・メアリーマウント大学)

大乘仏教と浄土真宗における欲望と慈悲

ウンノ・タイテツ (スミス大学)

仏教、キリスト教、浄土真宗における「欲望」の語

法について

ヤン・ヴァン・ブラフト

(南山宗教文化研究所)

親鸞における 'desire' 観

武田龍精 (龍谷大学)

○パネル3 (一一一三教室) (二四・五〇―一六・五〇)

「言葉と解釈——聖典の翻訳をめぐる」

司会 レスリー・カワムラ (カルガリー大学)

通訳 マーク・T・ウンノ

(スタンフォード大学)

コメンテーター ルイス・O・ゴメズ

(ミシガン大学)

常行三昧と『般舟三昧経』——『摩訶止観』の英訳
をめぐる

ポール・スワンソン (南山宗教文化研究所)

翻訳にあたっての覚え書き

ノーマン・A・ワデル (大谷大学)

如是我説——親鸞を翻訳するにあたっての哲学的考
察

トーマス・P・カスーリス

(オハイオ州立大学)

親鸞浄土教における言語観——信心と解釈

デニス・ヒロタ (本願寺国際センター)

通訳 多田 稔 (大谷大学)

八月五日 (木)

○パネル4 (一一一三教室) (九・〇〇―一一・〇〇)

「精神主義の意義——近代における浄土真宗の表現」

司会 安富信哉 (大谷大学)

通訳 マーク・T・ウンノ

(スタンフォード大学)

コメンテーター 寺川俊昭 (大谷大学)

「救済者」から「求道者」へ——暁鳥敏の「アミダ
仏」観の変遷

羽田信生 (沼田仏教翻訳研究センター)

主体性——精神主義の強さと弱さ

ギルバート・ジョンストン (エックカード大学)

精神主義の近代性と現代性

加藤智見 (東京工芸大学)

「精神主義」の広やかな意味

マイケル・E・バイ (ランカスター大学)

○総会 (一一一三教室) (一七・三〇―一八・三〇)

○懇親会 (食堂) (二八・三〇―二九・〇〇)

○セッション4 (一一一三教室)

(一一・三〇―一四・一〇)

「真宗研究の現代的な方法」

司会 野村伸夫（京都女子大学）

通訳 マーク・ブラム

（フロリダアトランティック大学）

親鸞の生涯におけるいくつかの問題点——事実と解釈

ジェローム・デュコール（マックギル大学）

浄土真宗と中世の宗教

ジェームズ・C・ドビンズ（オバリーン大学）

自己をならうというは自己をわするるなり——清沢の精神主義における禪

パトリシア・A・ホンダ

（東本願寺ロサンゼルス別院）

『宗教哲学骸骨』における「自由」の意味

樋口章信（大谷大学）

○セッション6、A（一三二二教室）

（一二・三〇—一四・一〇）

「真宗学の諸課題」

司会 長崎法潤（大谷大学）

通訳 ポール・スワンソン

（南山宗教文化研究所）

常行大悲——真宗が世界と関わる基礎

ケネス・K・タナカ（IBS）

念仏と聞 (stupa)

村石恵照（本派本願寺）

空・三昧・念仏

竹橋 太（大谷大学）

時機対応の法

一楽 真（大谷大学）

○セッション5（一三二三教室）

（一二・四〇—一六・四五）

「歎異抄研究の視座」

司会 多田 稔（大谷大学）

通訳 樋口章信（大谷大学）

司会 デニス・ヒロタ（本願寺国際センター）

通訳 伊東憲昭（ウエストコピナ東本願寺）

『歎異抄』における罪の問題

西田真因（真宗大谷派教学研究）

親鸞における業の問題

安藤文雄（大谷大学）

「親鸞一人がためなりけり」の頭わす意味——真実

の仏道への領ぎ

西崎京子（岡山女子短期大学）

「かわりめ」

今井亮徳（パークレー東本願寺）

親鸞における弁証法——特に『歎異抄』を通して

市村承秉（IBS）

○セッション6ーB（一二二二教室）

（一四・四〇—一六・四五）

「真宗学の諸課題」

司会 小谷信千代（大谷大学）

通訳 マーク・T・ウンノ

（スタンフォード大学）

「三願転入」の文脈における妙好人の宗教体験

アンジェラ・アンドラーデ（IBS）

自信教人信についての一考察

ジョン・イオハラ（龍谷大学）

六角堂夢告の象徴的意味

井上尚実（カリフォルニア大学

サンタバーバラ校）

○閉会式（一七・〇〇）

パネルとセッションにおける研究発表者は、以上の五
五名であった。その内、海外からの参加者は二八名で、
アメリカ、ドイツ、フランス、ブラジルなどの真宗研究、
親鸞研究の第一線で活躍されている方々であり、日本人
は二七名であった。また英語での発表が四〇名、日本語
発表が一三名であった。三日間にわたる大会の参加者は、
約四〇〇名で、その内国外からの参加者は約一〇〇名で
ある。

大会初日の八月三日（火）の夕刻から、大会を記念し
て日英同時通訳による公開講演会が、大学講堂で開催さ
れた。

ミシガン大学のルイス・O・ゴメズ教授の「浄土のイ
メージ——何が物語りを意味深くするのか——」（Texts,
visions, and Embodiment: Imagining a Pure Land）と寺川
俊昭学長の「信仰のダイナミックス——回向と願生——」
（Life in the Vow: Dynamics of Faith in Jodo Shinshu）
の講演に、講堂を埋めた聴衆が最後まで熱心に聞き入っ
た。

ゴメズ教授は、昨年度より大谷大学大学院の特別セミ
ナー「仏教学研究」（文献研究）の客員教授を勤められ、

また真宗大谷派の依頼で浄土三部経の英訳專業の第一期として、『無量寿経』と『阿弥陀経』の英訳に取り組んでこられた先生である。講演では、信仰と信仰の物語的表現に伴うイメージについて、特に浄土のイメージについて話された。イメージはテキストの創造物であるとともに、テキストについての注釈でもある。講演では、テキストがイメージされた世界を創造するのか、またその世界の地位がどのようなものであるのか、さらに物語を意味あるものにするのはなにか、今日われわれはいかに物語やイメージによって浄土を想像することができるのか、以前の人たちはいかに浄土をイメージしたのであるうか、それらの問題について大変緻密な思索を展開された。

また寺川学長は、浄土真宗の仏道としての積極性をどのようにに理解すべきであるか、と問題を提起され、曾我量深師の知見に立って願生浄土の自覚道であると解すべきことを力説された。一般には浄土真宗は往生浄土の仏道であると解されている。確かに親鸞は、法然の念仏往生の教説に出遇って、往生浄土の仏道に立ったのである。しかし親鸞が「眞実報土の往生」と言ったとき、それは基本的には、眞実信心がその利益として実現する生の意味であると解され、したがってその内容からいえば、

浄土を開示された生と解することができる、と語られた。そのような往生を実現する信心は、如来の願心の回向成就であるから、必ず願生浄土の信心として展開し、生きられるのである。願生浄土の信を、浄土の功德の自証と行証という視点から究明し、信心のもつ力動性について極めて具体的に力を込めて解明なされた。

四

時あたかも大学の大きな変動期である。大谷大学にあって、昨年短期大学部で文化学科が開設され、本年四月から文学部に国際文化学科が新設された。そして、この両学科の開設を記念して、四月から八月にかけて「過去より未来へ 照らし合う文化——異文化と出会う五カ月——」と銘打って、各種さまざまなイベントが催されてきた、その最後の企画がこの国際眞宗学会大会であった。

大学はいま大きな転換の時機に立っている。転換とは、無論新しい展開であり、充実である筈である。その展開充実の大きな視点になっているのが、いわゆる「国際化」である。大谷大学の国際化というとき、それは畢竟眞宗仏教の国際化ではあるまいか。しかし、その課題は

大きく重い。真宗仏教が、親鸞の思想が、世界の研究者達にどのように問題にされ、理解され、捉えられているのか、また大谷大学で真宗を学ぶわれわれは、いまだどのような状況のなかに置かれているのか、何が求められ、何を為さねばならないのか、などのさまざまなことが、このたびの大会でわれわれに提起されたように思う。ともかくも真宗の国際化の大きな動きを、いまはつきりと眼の当たりにする三日間であった。二年後の次回大会は、メキシコで開催されることが総会で決定された。夜の懇親会が学内食堂で開かれ、さまざまな出会いとさまざまな

な語らいが新しい友情の和を拡げ、時の過ぎるのを忘れさせるほどであった。

前回の国際真宗学会大会を機に、安富教授を中心に「欧文真宗研究会」が生まれ、若手の教員や大学院生、学生たちが、英語で書かれた欧米人の真宗に関する諸論文を読んでいると聞く。真宗仏教を国際的な視野で見直し、そのもつ新しい意味を見い出すということが、現在のわれわれにとって極めて大切なことである。そのような確かな活動が始まったのも、国際真宗学会大会の大きな成果の一つであると思う。

62